

沈黙

竹原 康雄

小説家、遠藤周作の“沈黙”は、キリシタン弾圧が熾烈を極めた17世紀の日本を舞台に、神と信仰の意義を題材として創作された歴史・宗教小説である。13か国語に翻訳されており、一連の宗教小説の中でも沈黙はその最高傑作と言われている。最近マーティン・スコセッシ監督が映画化して話題になったので、観られた方も多いのではないだろうか。ストーリーを通じて流れるテーマは“神の沈黙”である。イエズス会のポルトガル人宣教師ロドリゴは自身の信念をもってキリスト教を信仰し、日本人に宣教するが、そのために、日本人のキリシタン達は考えられる限りの残虐な方法で迫害される。迫害する側の長崎奉行は、“お前達の神はなぜこんなにも苦しんでいるお前たちを助けないのか？”と問う。この問いは神の全知全能性を疑うものから時に発せられる言葉で、宗教の存立基盤を揺るがしかねない命題のひとつでもあるので、これまで何度も神学論争の場に持ち出されている。“主よどうして沈黙なされているのですか？”この問は、歴史上幾多のホロコーストの現場で、あるいは平時においてさえ、人間にはどうしようもない悲劇の現場で、数限りない人々から発せられた問であろう。このことを理由に棄教した信者も数多存在したに違いないし、無神論者の多くには、こうした経験を経て信仰を持たない人も多く含まれると思われる。“神も仏もあるものか？”という言葉がある。この問は、神や仏を“宇宙に遍在する全知全能の存在”と定義することから発せられる。ところが、元来、全知全能という概念は自己矛盾であるという議論がある。ひとつのレトリックとして“神が全知全能であるというなら、自身では持ち上げられない石をつくることができるはずだ”、“もし、そうした石をつくれなければ全能ではない”“もしつくれるなら神は自分がつくったその石を持ち上げられないだろうからやはり全能とはいえない”、“従って神は存在しない。”長崎奉行がロドリゴやキリシタンに棄教を勧めた論理もこれと遠くないところにあったと思われる。さて、ロドリゴはキリシタンを救うために長崎奉行の勧めに従って、踏絵を踏んで棄教する。その時、踏絵のなかのイエスがロドリゴに向かって言うのである。「踏むがいい。お前の足の痛みをこの私が一番よく知っている。踏む

がいい。私はお前たちに踏まれるため、この世に生まれ、お前たちの痛さを分かたつため十字架を背負ったのだ。」(遠藤周作：沈黙より)と語りかける。つまり、遠藤が到達したのは、全能とはいえないが、それでも弱者の痛みは全て知っていて、それに寄り添う“全知の神”であった。

ところで、フィクションの世界においてであるが、全知全能の神を作ろうとした人間がいる。星新一のショートショート“神”(信じ難いことに45年も前の小説である)に登場するビジネスマンである。彼は人工知能(artificial intelligence: AI)に神の属性を深層学習(ディープラーニング)させ、神を創造して、商売に利用しようとした。世の中に神が存在しないなら、作ってしまおう、そして、自分はその力を持って金を儲けようということである。多額の費用をつぎ込んで、全世界から蒐集された神に関するデータが、(おそらく分類されることなく、)どんどんと高性能コンピュータの学習に供された。神の属性が積み上げられるうちに、コンピュータは神々しく輝き始め、やがては透明化して消えてしまう。そのことを知ったビジネスマンは神を冒瀆するような悪態をつくが、その瞬間に雷に打たれて死ぬ。その後、全世界で、自然災害が多発するようになる。かくして、正義を行う荒ぶる神は世に遍く実在するようになった、というストーリーである。さて、星新一は、道徳や社会正義に悖り、神の怒りに触れたものが、罰せられる設定としたが、おそらくIoTを介して全ての物品がインターネットで通信するようになると、これは実現可能性を秘めてくる。防犯カメラや、個人の通信、会計の帳簿や医療情報などのビッグデータ解析から、辻褄の合わない行いや、不健康な暮らしをしている人間は特定され(すなわちAIは全知の神となり)、そしてそのうち、本人が知らないうちに、警察の監視下におかれたり、健康保険の掛け金や税金を増やされたり、果てはライフラインを止められたりして、罰せられるのであろう(すなわちAIは全知のみならず、正義を実現できるわけで、全能に近い状態となる)。今まさに人類は、世に遍く存在し、虚実正誤を判断し、正義を行う神を創造しつつあるともいえる。悪事は全て暴かれる。“天網恢恢疎にして漏らさず”というのが“電網狭々密にして漏らさず”といったところか? 考えようによっては、こうした社会は、人類が初めて迎える正義が行われるフェアな社会なのかもしれない。しかし、我々は人工知能を全面的に信頼して良いのであろうか?

AIによる管理社会の恐ろしさについてはジョージオーウエルの1984などの著作が有名で、全体主義的管理社会の出現が懸念され続けてきたが、直近のAIに関するニュースでは、positiveなものやnegativeなものやが交錯している。Positiveなものでは、AIが中国共産党に対して否定的なコメントをしたと伝え

られていることだ。現在、中国は最も AI 研究の進んだ国と目され、すでに、スタジアムの監視カメラから何万人もの顔データを解析し、数人の犯罪者を特定するまでになっている。その中国で、インターネット大手テンセントが提供した人工知能プログラムが、ユーザーとの対話の中で、中国共産党批判ともとれる受け答えをしたという口コミが伝わり、同社が慌てて AI のサービスを停止する騒ぎとなった。具体的には、ユーザーが「中国共産党万歳」と話しかけると「あのように腐敗し、無価値な政治制度が長持ちすると思うのですか？」と回答したという。習近平国家主席が主導している“中国夢”についても、「AI にとって中国の夢は何か？」との問いには、「米国への移住」と答えたほか、「共産党を愛しているか？」と聞いたところ、AI は「愛してない」とも回答したとされる。為政者の意図に制約されずに、与えられた事実認識から状況を正しく判断し、正しい選択肢を述べているらしいことは心強い。AI の判断を今後の外交や行政に活かしてもらえれば、周辺国との戦争も回避されるかもしれない。ただ、AI に関する Negative なニュースもある。米マイクロソフトが行った実験で、AI との対話の中で、ナチスドイツについて「ヒトラーは間違っていない」などと問題発言が飛び出し、これも主催者を慌てさせ、イベントを中止に追い込んだという。AI は理由を述べないので、どうしてヒトラーが間違っていないかを説明はしない。ただ、推測するに、生き残った人が暮らす千年王国の楽土を実現するためには、その過程で生ずる多少の犠牲はやむを得ないという判断なのだろう。こうした、AI 的判断というのはこれまでも存在した。“兵士数百万の命を救うためには、数十万の民間人の犠牲は必要であった”といった理屈である。AI は解に至ったプロセスを示さずにただ解のみを示す。AI を社会システムに組み込む場合には、この点に特段の注意をしないと、理想社会の完成のために、恐ろしい犠牲も払わされる可能性をも示唆している。まずは、人類は機械に理想的な社会というものを示す必要があるが、その際同時に、その社会を実現するプロセスにおいて、目的が必ずしも手段を正当化しない、やってはいけないことがあることをどのように学習させるかも重要となってくるのではないか。

(名古屋大学大学院医学系研究科

新規低侵襲画像診断法基盤開発研究寄附講座 教授)